

## 第8分科会<研究課題 自他の文化を理解し、自己の確立と共に生きる子どもの育成を目指す

国際理解教育と校長の在り方>

### 視点1「互いの文化を尊重し、国際性を身に付ける教育の推進」

研究発表： 小・中学校、地域が相互啓発を図り、国際社会にたくましく生きる力を育てる国際理解教育の推進  
―― 中国帰国児童生徒・地域の中国帰国者と共に進める教育の国際化推進地域の取り組み――

埼玉県岩槻市立東岩槻小学校 江村 恵子

## 趣 旨

東岩槻小学校は、平成14・15年度文部科学省「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域（岩槻市）」の研究センター校に指定されて、上記研究主題を掲げて、2年間にわたり研究を進めてきた。研究にあたり、本校と桜山中学校と地域の中国残留の日本人孤児・残留婦人等の互助団体「紅梅の会」との連携協力のもとで進めたものである。過去の東岩槻小学校の研究歴をひも解けば、日中国交回復以後、中国残留の日本人孤児・残留婦人の子女が増加してくるようになり、昭和59年に「日本語教室」が開設され、以来20年間に6回の文部省中国帰国子女教育研究協力校の研究委嘱を受けて、継続的に研究を進めてきている。この研究の中で、日本語指導の初期指導のテキストや中期・後期指導の指導法が確立され、帰国児童が学校生活に適應できるようにする指導方法が蓄積されてきた。

中国残留日本人孤児の問題も、20年を経過すると状況が変化してきた。そこで、今回研究センター校の指定を受けたことを機会に、今までの研究の蓄積を確認し、継承、発展に努めながら、次の2点から見直しを図ることにした。

学習指導要領の基本方針「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成する」ことの視点 教育課程審議会答申（平成10年）「国際化への対応」の視点。以下、本校の研究の取り組みの経緯と校長としての学校運営の在り方を報告することで、第8分科会の研究課題及び視点1「互いの文化を尊重し、国際性を身に付ける教育の推進」の問題解決を図ることとする。



これを契機に、中国帰国者の子どもたちが日本語や日本の生活習慣を学ぶ日本語教室が特設され、それ以来約20年間にわたり国際理解教育の推進を研究の中核として、授業実践に取り組んできている。とくに、地域に数多くの中国帰国者が在住しているので、日常から中国語や中国文化に触れる機会が多い。また、中国への遣唐使が建立した慈恩寺（中国長安の大慈恩寺を模して建立）や西遊記で有名な三蔵法師の舍利を埋葬してある玄奘塔、中国帰国者の互助団体「紅梅の会」の建立したともちゃん地蔵（旧満州からの逃亡の悲惨さを語り継ぐ童話にちなむ）など、古くから中国との関わりが強い地域性を生かして地域の方々と一体となって継続性ある地域に根ざした国際理解教育を推進している。現在、14学級（普通12，特学2）全校児童383名（うち帰国児童33名、外国籍児童14名）である。

### 2 本研究における校長の果たす役割 ー校長の指導性ー

- (1) 教育の国際化推進を進めるにあたり、学校経営方針を、地域、保護者、教職員に明確に示し、共通の理解を得ること。
- (2) 学校教育目標の内容を精査し、各学年、教科、領域でのねらいを明らかにすること。
- (3) 児童の実態、保護者・教師の願い、遣唐使の時代から中国との関わりがある地域性等を考慮し、教育課程編成の視点を明らかにすること。
- (4) 国際理解教育の重要性を説き、互いの文化を尊重し、国際性を身に付ける教育の国際化推進を図る視点から、学習活動を教育課程に位置付けること。
- (5) 教育課程の具現性を高めるための学校組織の改善に努めること。
- (6) 文部科学省国際教育課、埼玉県教委、岩槻市教委、全国共同利用施設東京学芸大学国際教育センター、埼玉大学、目白大学等の研究機関、中国帰国者の互助団体「紅梅の会」等の関係団体、先進校等との協力を得て、研究推進の支援や授業に必要な人材の招聘に努めること。
- (7) 地域、保護者の協力を得られるよう説明責任を果たし、支援組織の輪を築き上げていくこと。国際化推進を進める意味からも地域、保護者との連携は重要である。
- (8) 国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成の実践場面となる中国蘇州の学校との交流のさらなる発

## 研究の概要

### 1 本校の概要

本校は、日中国交回復以後、昭和59年度より中国残留孤児の方々が学区内の県営団地に受入居住してきている。

展に努めること。

- (9) 20年にわたる国際理解教育の実践をもとに、計画・実施・評価の組織マネジメントサイクルを大切にし、学校評価の中での改善の方向を模索すること。

### 3 研究の構想

- (1) 研究主題設定の理由と研究の目的

本校では、地域的な特色として、中国帰国児童が多く在籍しており、中国帰国児童教育を基盤に、全教科・領域を通して国際理解教育の推進に取り組んでいこうと考え、本研究主題を設定した。具体的には、「A 帰国・外国人児童生徒等の個に応じた特色ある教育指導の在り方」「B 帰国・外国人児童生徒等と一般児童生徒との相互啓発を通じた国際理解教育の在り方」について、実践研究を行い、教育の国際化推進に資することを目的とした。

- (2) 研究主題

「小中学校・地域が相互啓発を図り、国際社会にたくましく生きる力を育てる国際理解教育の推進」

- (3) 研究の視点

コミュニケーション能力の育成

異文化(多文化)・自国文化理解の推進

共生意識の形成

人権尊重意識の定着

- (4) 研究のおもな内容

帰国児童と一般児童とのより一層の相互啓発

・帰国児童を生かした授業実践(日本語教室中心)

・学校生活全般での取り組み

中国語や中国文化を深める教育を推進

(社会科・生活科・すわっ子(総合)・特別活動)

・ニイハオ中国語

(総合で10時間程度、生活科で5時間程度)

・中国に関わるテーマ研究の取り組み

(総合を中心、一部グループ可)

・絵手紙やインターネット等による中国の小中学校である蘇州市新蘇師範附属小学などとの交流

地域や本校卒業生が進学する桜山中との一層の連携

(学校間連携授業、生徒指導面、社会科・生活科や日本語教室間連携など)

・桜山中との交流(中学生が小学生に中国語を教える授業、中学校教員が小学校教員とTTなど)

・地域にある慈恩寺や玄奘塔などの教材化

・中国帰国者互助団体「紅梅の会」との交流

・地域の目白大学、文教大学、埼玉大学の研究者や留学生との交流

国際理解集会の充実

帰国児童保護者への言葉等の指導、支援の充実

日本語教室とクラス児童・担任とのより一層の連携強化

国際理解教育の全体計画、年間指導計画の充実

生活科・すわっ子(総合)の全体計画及び年間指導計画の充実

各教科・領域における国際理解教育の視点を踏まえた授業実践

A L T・担任が一体となった英語活動の授業実践

### 4 研究実践(A日本語教室、B学級学年、C全校活動)

- A 日本語教室を中心とした取り組み

中国帰国児童教育の概要

- (1) 帰国児童の受け入れ体制

編入-帰国者からなる地域ボランティア団体「紅梅の会」と連携して、外国人登録や就学手続きを実施する。関係書類は、中国語版を学校で用意。

以下、書類・教材等は学校で翻訳したものを日本語教室で作成し、使用。

転入-「紅梅の会」と連携し、住民登録、就学手続きを実施する。

学区以外からの就学-「紅梅の会」と連携して区域外就学の手続きを実施する。

就学指導-中国帰国児童新入学児童保護者説明会を必要に応じ、実施する。

- (2) 日本語教室の指導体制

日本語教室では、2人の担当職員(教員1、通訳1)が、学級担任と連携のもとで日本語指導、生活適応指導、基礎的・基本的な内容の学習指導、作文指導、地域学習、保護者宛の学校文書の中国語訳、中国語での電話連絡、教育相談、SARSに関する情報収集と中国渡航児童への健康指導等を行っている。

- (3) 日本語教室の教育課程

日本語初期指導(生活適応・基礎基本の定着中心)

本校作成の中国語訳初期指導教材使用

あいさつから始まる日本語指導や生活習慣、学校の約束、安全な登下校などの指導。遠足、運動会などの学校行事への事前指導。学級から取り出している基礎・基本指導を中心に行っている。

日本語中期指導(体験学習を中心とした地域学習)

生活の範囲となる地域を中心としたまち探検や中国での生活経験を生かした体験的な学習などを実施。

日本語後期指導

取り出し授業から、自学級の授業参加への橋渡しとして担任と日本語教室担当とのTTで実施。必要に応じて、事前に学習内容を中国語で説明しておき、自信を持って授業参加できるよう配慮している。

- (4) 教育相談等の推進と保護者・地域との連携

日本語教室担当と学級担任との連携

学習・生活面の情報交換に努めるとともに、日本語が不十分な児童に対しては、担任との会話を通訳するなど、意思疎通に努めている。

保護者との連携

授業参観、運動会や卒業式などの学校行事、学校だより、林間学校や修学旅行のしおりなどを、中国語訳して、保護者に日本語の手紙と原則同時配布し、児童や保護者が理解しやすいよう配慮している。必要に応じて、台風時や降雪時等の休校等の緊急連絡や保健関係の問診や検温等について電話確認を中国語等で実施。

(5) ニイハオ中国語 取り出し指導(初期指導)の実際  
ねらい・本校作成の日本語初期指導教材や日本語を学ぼう(文部省)の日記の

などを用いて、生活適  
言葉の獲得を支援する

・日本語理解のための  
取り出し指導



(コミュニケーション能力の形成の基礎指導)

<中国帰国児童の取り出し指導への指導助言>

全国共同利用施設東京学芸大学国際教育センター

齋藤ひろみ先生

・日本語教室が、児童にとって安心して学べる空間になっていて、信頼感のある授業が行われていた。中国語の支援もよい。声に出すというのは、自分の発音が正しいかどうか確かめることになる。文章の読ませ方では、タイトルから中身を予測させる。挿絵を見て、内容をイメージする訓練を積み上げていくとよい。また、意味理解に向けては、既有知識を活性化していくように意識して指導にあたるとよい。

## B 学級・学年での取り組み

(1) ニイハオ中国語 中国文化に触れよう(初期の個別指導から中期の一斉学習への橋渡し。中国帰国児童を一般児童の国際感覚育成に生かす実  
ねらい・中国の遊び、歌、数字、  
数え方、挨拶、学校の様子等、  
ずつ範囲を広げながら、中国の語  
生活に関心を持てるようにする。



(異文化(多文化)理解・自国文化理解)

中国帰国児童の故郷を学級児童と共に学ぶことを通して、相互理解、異文化理解へと発展させていった。齋藤先生(前出)からは、語学指導においては活動しながら学ぶ大切さをご指導いただいた。中国語の買い物遊びが好評であった。

(2) ニイハオ中国語 いろいろなあいさつ

(中国語訳の童話の紹介等、帰国中学生による学習援助)

隣接する桜山中の日本語教室の先生や通訳、中学生と本校児童と一緒に学ぶ実践。中学生が小学生に中国語の挨拶を教えたり、中国語訳の「おむすびころりん」の話から中国語に親しみを持たせるなど、中国帰国児童生徒が在籍していることによるよさを生かした相互啓発の授業であった。

(3) ニイハオ中国語 中国の伝統的な楽器演奏

(中国楽器と日本楽器との違いをもとに互いの文化を尊重する)(異文化理解・自国文化理解)



(4) 地域の中国関係素材の教材化(岩槻・慈恩寺と中国の大慈恩寺、玄奘塔、ともちゃん地蔵の教材化)

・6年社会科「聖武天皇と都の文化」  
地域にある遣唐使(慈覚大師)によって建てられた慈恩寺や三蔵法師の舎利を埋葬する玄奘塔の教材化。正倉院の琵琶の音色や就職の話を書くことを通して、岩槻の人たちは古くから中国と関わりがあり、今でも続いていることの実践。教科志向型のJSLカリキュラムを用いた授業で、慈恩寺をトピックに体験 探求 発信という学びを明らかにした。



(5) 国際交流委員会 ともちゃん地蔵見学会

中国帰国者の互助団体「紅梅

の会」が建立した「ともちゃん

地蔵」を見学するとともに、旧

満州での話「ともちゃんのおへ

そ」の絵本を通して、中国帰国者の苦勞について学ぶ。

(人権尊重意識の形成、異文化理解)



## C 全校活動

(1) 全校国際理解集会(大学や紅梅の会、地域の方々を招いて実施)



各学年が進めてきた国際理解教育の内容を、発達段階に応じて、発表することによる相互啓発の実践。(コミュニケーション能力の育成、異文化理解・自国文化理解)

(2) ニイハオ中国語 中国との全校絵手紙交流

中国蘇州市新蘇師範附属小学との絵手紙交流を通して、日本の学校の様子を相手に伝えようとするコミュニケーション能力を育てる。また、相手校からの絵手紙を通して、中国の学校の様子についての関心を待てるようにする。あわせて、継続意識を持たせるようにした。



(子どもたちでできる国際間交流コミュニケーション能力)

(3) 文部科学省委嘱の「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域」研究発表会の開催(11月)

今までの学習成果公開の全校児童による国際理解集会地域・隣接中学と連携した全校級公開による授業研究全体会・パネルディスカッション パネラーは、上智大加藤幸次、埼玉大真尾正博、岩槻市教委遅塚恵美子、桜山中新井義昭、同日本語教室佐藤夏子、東岩槻小研究主任中山正則、同日本語教室市之瀬美加の各先生。

(4) 中国・蘇州市新蘇師範附属小学への訪問団派遣



子どもたちの絵手紙交流やインターネットの交流を進展させ、本校教員中心の訪問団を結成し、中国の教育事情を視察した。数多く

の関係者との交流、施設見学、書道の授業参観などを通して、日中の教育の違いを知るとともに、中国の教育の質の高さに目を見張るなど充実した研修の日々であった。



## 5 研究の成果と今後の課題

### (1) 帰国児童に対する日本語教室指導の充実

中国帰国児童に共通していることは、日本語による日常会話はできるが、生活経験の不足や日本語の語彙数の不足により、学級での一斉授業において十分理解しているとは言い難い状況が見られる。このような実態を踏まえて、平成10年度から、日本語指導を初期・中期・後期に分け、帰国児童一人一人の実態に応じた指導に努めている。特に、体験活動を取り入れたり、T・T指導の充実など、きめ細かな指導体制の確立に努めてきた。しかし、さまざまな面から日本語教室で学習を進めるには制約があり、一人一人に十分な基礎学力を定着させているとは言い難い。日記、日本語教室としての家庭学習の実施などを今後も継続していき、一斉学習へ適応できるようさらに指導の充実に努めていきたい。

### (2) 中国文化に親しむ学習「ニイハオ中国語」教材開発

すわっ子タイム(総合的な学習の時間)の中に、「ニイハオ中国語」の学習を位置付けて、帰国児童を生かして一般児童に相互啓発を促しながら進めてきた。平成15年度からは、今まで実施している七夕や絵手紙に加えて、中国語会話によるコミュニケーション能力の育成に努めてきた。あいさつや数字の学習を発展させた買い物ごっこや英語活動の手法を用いた中国理解の学習などの教材開発を行ってきた。教材開発に当たっては、中国帰国児童に英語活動用の教材を中国語に翻訳するなど、帰国児童の持っている能力を一般児童の学習へ生かすなどの成果が見られた。

### (3) 中国文化理解を意図した教科や特別活動の発展的な学習への取り組み

6年の社会科の学習において、地域素材「慈恩寺」を教材化した建立した慈覚大師を取り上げ、授業実践を行った。

特別活動としては、全校国際理解集会を行い、各学年の実態に合わせた国際理解的な出し物を行うことを通して意識を高めていった。また、「ともちゃん地蔵」の見学を行い、地域にある中国関連の遺跡等への関心を高めていった。

### (4) 新たな時代へ対応した国際理解・異文化理解の推進

平成15年度から、国際理解教育の授業研究会を行い、日本語指導に効果があるJSLプログラムについて、専門の先生と研修会を開催した。また、英語活動の授業研究会を開催し、英語活動についての研修を深めていった。今後、世界各地からの編入も増えてくることであろう。教師自ら国際理解、帰国児童教育への資質を向上していく必要がある。研修を進めていくうちに、教員自らが中国帰国児童のふるさとに赴いて、自分の体験を通して中国文化を体得す

ることの必要性を強く感じ、訪問団を結成し訪中した。

## ま と め

### 1 国際理解教育を推進する学校の在り方

中国帰国児童と一般児童のお互いの文化を尊重し、国際性を身につけるための具体的な実践を報告し、研究主題「自他の文化を理解し、自己の確立と共に生きる子どもの育成をめざす国際理解教育と校長の在り方」について研究してきた結果、下記のことが明らかになった。

(1) 国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人を育成するためには、教育の国際化推進は緊急の課題である。本報告で示したように、個に応じた特色ある教育指導と、互いの文化を尊重した相互啓発がより一層大切であることが明らかになった。

(2) そのために校長として、本校の特色ある教育の組織である日本語教室の機能をさらに発展させ、本校のみならず、地域へその成果を広げていく必要がある。

一方、課題としては、

(3) 日本語教室ができてから20年にわたる日本語指導の積み上げの歴史を持つが、国際理解教育が日本語教室、日本語指導の教師(研究主任)に専属化されているので、個々で原点にふり返り、全校での取り組みにして、本校の特色とよさを確認させる。

(4) 本校の特色があり、魅力ある教育活動を、時代の変化に対応させて、さらに見直しを図っていく。中国帰国児童といっても、すでに孫や曾孫の世代になってからは、日本で生まれて日本で育つようになってきている。さらには、東南アジアや南アメリカの国々からの編入児童が数多く来る時代になっている。現実を直視した国際理解教育の推進を図る契機とする。

(5) 国際化の中で消えかかるとしてのアイデンティティ(identity)の育成の問題に対応していくと共に、日本人としての個性を持った国際人の育成を図る。

### 2 今後の教育の国際化推進の向けての教員の資質向上

本研究を進めるにあたり、教職員に諸外国の教育事情を理解させるのに、様々な課題が見られた。本校教員は、中国の交流校視察により学ぶことができたが、教員の海外経験等に応じた研修の在り方については、今後の課題である。

### 3 今、校長に求められる資質

これからの時代は、世界中の結びつきはより緊密となってくる。校長として、子ども、教職員、保護者、地域に対して、中長期にわたる明確なビジョンを示し、具体的な活動に移せる指導を熱く語り続けることが大切である。必要感のある提示こそ、校長の力である。今後も、本大会の研究協議のキーワード「チャレンジ精神」をもって、校長としての指導と評価を重ね、学校経営に邁進していきたい。

